

歴史を読み解く : さまざまな史料と視角

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授 : 日本史

<https://hdl.handle.net/2324/17117>

出版情報 : 歴史を読み解く : さまざまな史料と視角, 2003-11. 青史出版
バージョン :
権利関係 :



8 原城の戦いを考え直す——新視点からの新構図——

一 海の城、原城

南有馬町教育委員会によつて原城跡の発掘調査が継続されている。メダイ、ロザリオ、クルスをとともなう夥しい人骨、骨片。天草・島原の乱（寛永十四〜十五、一六三七〜三八）の最終段階、原城における悲劇の光景が、まざまざとよみがえつてきた。落城後、徹底的に破壊されたという原城ではあるが、実際には堅固な石垣は残されていて、発掘で全貌を表した。それはただ埋められていただけだった。それ以前に、一段階、一揆方が籠つた段階での原城は相当なる要害の城だったのではないか。

落城後に城は破却された。その時の埋土から大量の瓦が出土する地点があった。本丸正門（大手口門）跡の近くである。廃棄されていたのは糸切引という製法の瓦である。近世の初頭に、瓦の製造技法に技術革新があつて、粘土板を切る方法が従来の糸切引に対し、鉄線引瓦に変わった。糸切引瓦は、慶長期（二五九六）頃まで主流の瓦である。寛永期（二六二四）になれば、鉄線引瓦が主流になりつつあったが、原城跡ではその技法による新瓦は出土せず、古瓦のみが出土する。

原城には乱の終結時まで、瓦を葺いた建物があつた。そしてその建物の瓦は、主として三〇年ほど前まで多用されたものだった。この瓦溜のなかに、鯰瓦風の飾り瓦が二個体分出土した。手と考えられる部分の瓦も出土しているので、鯰ではなく龍を表した瓦だと考える人もいる。龍であれば、中国風であ

る。琉球や中国の建物に近い外観だった。

原城は一五九九年秋のイエズス会宣教師の報告中に、「アリマ殿が新城を築いている」とあることから、慶長四年（一五九九）に修築されたと考えられている。マテウス・デ・コウロス『一六〇三年年報』（慶長八年）やジョアン・ロドリゲス・ジラン『一六〇四年年報』（慶長九年）にも、晴信が原城を修築した記録がある。有馬晴信に替わった領主、松倉重政は原城から島原城への移転を行う。島原城築城は元和二年（一六一六）に開始された。このとき原城は修築後二〇年も経っていない。頑丈な城郭建築だから、いまだ新築に近い状態だった。さらに約二十年後、即ち原城廃城二十年後、島原の乱のおりにも一部の建物は壊されずに残っていた。四〇年後でも耐用年数は十分にあつて、まだまだ取り壊すほどに老朽化した状態ではなかったのだろう。原城は古い建物が一部に残る城だった。

乱の終了後百年も経つと、多くの攻城図や合戦屏風が作られようになる。だがそれらの絵では、一揆の籠もる原城には茅葺きの建物が画かれるのみだった。鯨瓦（龍瓦）が出土したということは、原城本丸正門（大手）周辺に鯨瓦（龍瓦）の載る建物が建っていたことを語る。それは城郭建築そのものである。緊急に籠城したキリシタンたちが、新規に鯨のある城門を建てたとは考えられない。建てた人物は、この城を築いたかつての領主有馬晴信以外にはいない。晴信以来の建物が、有馬氏の転封を経たのち、新領主松倉氏の時代となって、居城が島原新城に移ってから、依然一部が残っていた。つまり一揆軍は有馬氏の築いた城に入城したのである。

一揆方が残したものも多い。なにより人骨、骨片。すなわち遺体である。籠城した民衆は名前こそ残さなかったが、自身の肉体の一部を残していた。しかしどれひとつとして、頭から足まで、全体が揃っ

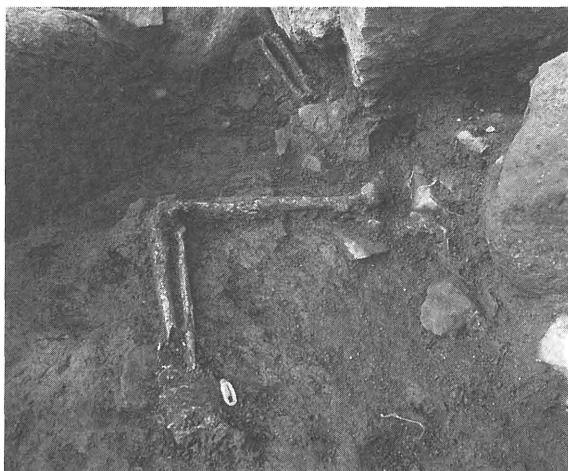


図 27 本丸大手口正門から出土した人骨
(南有馬町教育委員会提供)

たものはない。損傷が甚だしい。死亡時にもひどく破損しただろうし、その後にも無造作に投げ捨てられ、その上に巨石が投げられた。その遺体に伴ってメダイ、ロザリオ、クルスなど多数の遺物が出土する。

高い石垣の直下には竪穴住居が整然と並んで検出された。各住居にカマドの検出はなかった。これこそ一揆方民衆の家である。かつ共同生活を行っていた痕跡でもある。それぞれの家族が各家に入り、食事は共同の台所（炊事場）で行われていた。

十字^{クルス}を刻した花十字瓦も出土。長崎では教会の跡からこの花十字瓦がよく出土する。いまのところ原城におけるこの瓦の出土点数は少ない。というよりも破片のみだ。一揆には瓦を焼く時間は与えられないだろう。

かった。花十字瓦はどこからか運ばれてきたか、おそらく原城の中心には教会があった。持仏堂に似た存在であろう。

原城の発掘によって得られた多くの知見では、いわゆる通説との乖離が甚だしい部分がある。われわれは島原の乱の際に一揆方が籠った城は石垣も何もない廃城だと思いこまされていた。歴史学者でさえ

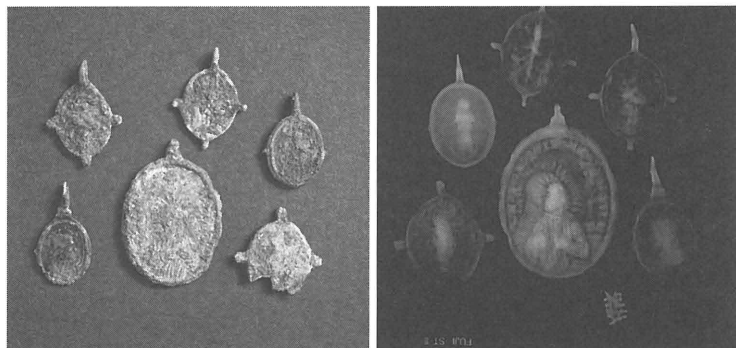


図 28 メダイ (右は X 線写真。南有馬町教育委員会提供)

も、そう説いていた。島原築城に際し、海を利用して原城の古材、石垣を運んだーというのである。発掘調査はその常識を覆した。いったい、いつ、誰がこうした虚像を作りあげていったのだろうか。

原城の城門のいくつかは、海（島原湾・有明海）に面している。わたしは以前からそのことを不思議に思っていた。大手である日ノ江口（樋上口）とも書かれる）のほか、田尻口、池尻口（蓮池門）などの城門があり、それらは海に面して開口している。

いわゆる海城、たとえば讃岐高松城の水の手門や、備後三原城の船入りを連想させるものだった。原城は最大限に、有明海を利用して作られた城で、海に開かれた城だった。

海は一揆の基盤である天草諸島と有馬を結ぶ。さらには東シナ海を通じて中国大陸に、また遠くはヨーロッパにもつながる。キリシタン大名有馬氏は、この有馬地方にセミノリオ・コレジオを開校し、そこで学んだ少年たちは天正遣欧使節として、はるかローマにまで行っている。日本の西端、有馬・原城は海を通じて世界につながっている。

しかし天草・島原の乱の考察に際しては、原城のこうした特



図 29 原城出土飾り瓦
(左) シャチ、または竜 (右) 手。竜か

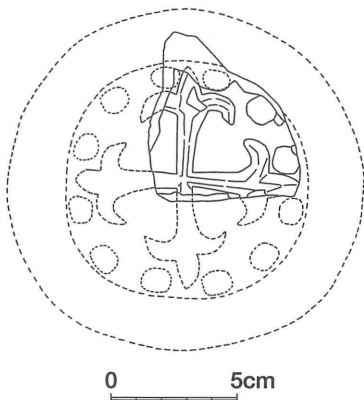


図 30 原城出土の花十字紋瓦 (右は復原図)

色が考慮されることはなかった。幕府方の船が原城を取り囲み、海上を封鎖している。そういうイメージだけが あった。それは孤立した原城だった。しかし原城を海上から攻撃しようとしても、汐の流れが激しく、一ヶ所にとどまっていることはできない。攻撃した側が残した記録にも、そう書かれている。

「潮行早く船懸り候儀不罷成、潮のたるみ〱に鉄砲を放申候」〔有馬記録〕・『島原半島史』中、二八五・二九九頁

「口ノ津より壱里こなたにて塩ニ向申候故、船のほり不_レ申、おさせ申候得共、早崎之塩はやく御坐候而、跡にさかり申——」〔部分御旧記〕・『熊本県史料・近世』三・二〇二頁

有明海は干満差が大きい。一日に二度、四メートルの干満がくり返される。落差四メートル……向きを変えて潮は急流となる。攻め手は一カ所にとどまることはできず、有効な射撃ができなかった。攻城軍の一員はそう記していた。

むろん、たるみ（満潮ないし干潮の潮の停止時）には打てたわけだが、鉄砲の有効射撃距離は二〇〇メートルというから、海からの短時間の攻撃では、さして打撃を与えることはできない。上陸すれば逆襲された。

逆に籠城側に有利になった点が多い。潮は眼前に急な川の流れがあるようなものだ。北流が六時間後には南流となる。川での舟運は下流から上流には使いにくいが、ここでは逆の方向にも舟が使える。潮の流れに乗れば、天草にも行けるし、宇土半島（三角半島）とも連絡が取れた。おそらくは食料や燃料・薪など物資の補給、人の入れ替えも可能だった。

熊本藩は芦北郡の佐敷、津奈木、宇土郡の赤瀬、塩屋、大田尾、戸口、飽田郡の河内など「浦々舟

着」に張番を置いた（『綿考輯録』五一四三四頁）。特に原城の対岸、熊本藩領である宇土半島のそれぞれの津には、配置された人数も多く、厳しい警備だった。それでもかれらはしばしば警備の手薄さを上層部に訴えている。戸口浦守備兵の言い分によれば、舟のつけやすい浜は四、五丁（五〇〇メートル以上）も続き、一般の船の出入りも多く、紛れこまれたらチェックしきれない。しかも隣の守備兵の担当する地区まで一里もあつては、鉄砲二人分の手勢では「手つかへ」が生じると嘆願している。

「夜の内ハ、猶以所々無_ニ油断_一様ニ被_レ入_ニ御念_一」

夜はとくに危険だった（以上「御家中文通の内抜書」『原史料で綴る天草島原の乱』一三八、二六五、三〇八、八五一頁ほか多数）。

海によつて閉鎖され、閉じこめられた城。そうした原城のイメージは根本的にまちがっているのではない。通説は根本から問い直したい。原城の発掘が大きな示唆をくれた。

二 内 乱 へ——各地に派遣されたキリシタンの使者たち

寛永十四年（一六三七年*但し日本暦十二月は西暦では一六三八年になっている）十二月、天草・島原の乱、さなかのことである。日向往還の道筋の村、肥後国阿蘇郡小森で、一人の旅人が捕えられた。その名を八兵衛といった。彼は島原半島の先端、口之津に住むキリシタンであつた。乱の直前には長崎にいた。天草四郎の父、甚兵衛とも知り合いだという。

阿蘇外輪山、護王峠を越え、まつすぐいけば日向延岡。その延岡はいま、有馬氏の領地だった。有馬氏こそ原城の旧主。いうまでもなく、かつてはキリシタン大名だった。そこにはむかしのキリシタン仲



図 31 細川忠利（左）と忠興の印章

間が多くいる。彼らに連絡をとる。あわよくば蜂起を促す。それこそが彼の任務だっただろう。とらわれた八兵衛は乱の終了まで拘束され、その後火あぶりにされた（『御家中文通の内拔書』『原史料で綴る天草・島原の乱』〇三三八、二四八、七〇九、一四六五、七四、一五四二）。

幕府首脳は島原の乱の各地への波及を極度に恐れていた。日本にはキリシタンはまだ多かった。

乱の発生を知るや否や、十一月十三日、直ちに山形城主保科正之、庄内藩主酒井忠当、四国松山藩主松

平定行、今治藩主松平定房ら奥羽や四国の諸大名に国元への帰国を命じた。

それは「天草蜂起による不慮に備えんが為」だった（『寛永日記』、保科家の

記録「はにつれいじん土津霊神事実」）。

その前日の十二日、熊本藩主細川忠利は仙台藩主伊達忠宗に書状を記し、領内の転び切支丹の動きを警戒せよと忠告している。

「一 きりしたんの儀に候間、如何儀之才覚を遠国へ可_レ仕も不_レ存候

間、御国内も其御分別を被_レ加、おち候きりしたんへ*転びキリシ

タン、転向者へ心を付候へと可_レ被_レ仰付候哉、我等国なども、前

廉_{かど}おち候きりしたん、成かへりへ*再転向の番を仕られへ*警戒・

監視申候」（『綿考輯録』五一―一九五頁、『原史料で綴る天草・島原の乱』〇

三一四）

手紙を書いた細川忠利は、今でこそ弾圧者の側に廻っているが、母はかのガラシャ夫人である。母からの影響を受けなかったはずはない。若き日

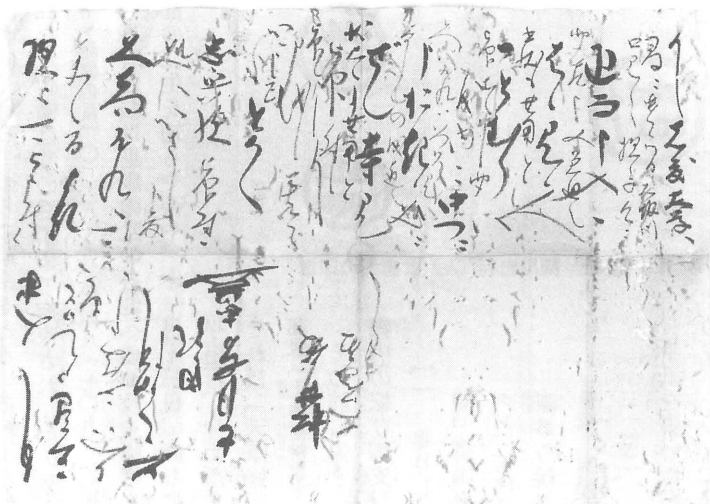


図 32 細川忠利書状 ((財)松井文庫蔵、八代市立博物館提供)

ガラシアの年忌祭は豊前・中津時代には「はてれん」(下段1行目)で行われていた。

追而申入候、
(細川ガラシア)
 は、にて候人
(弔)
 御とむらい
 之儀、内々中つ二
(連)
 申おき候処二、
(連)
 ぜん寺にて
 被仰付候よし
 申越候、其分
 候哉、とかく
 忠興様 被仰付候
 処へ、心さし申度候、
 久右衛門尉それへ可
 参候間、よき
 様二可被申付候、

「折返し」(六)
 「もし又、半
(テレン)
 天連にて御とむらい
 候へハ、不及申候、
 恐々謹言、

内記

七月七日 忠利(花押)

松井殿
(康之)

大学殿
(沢村吉重)

進之候

にはローマ字の印判を使用している(図31)。母の死後も一六一〇(慶長一五)年まで豊前の教会で年忌祭をとりおこなっていた。禅宗での法要へ切り替えを指示してきた父忠興に、疑念をいだいた書状が残っている(図32)。細川家には家の紋「九曜」が入った南蛮鐘まで伝来している。教会の鐘であろう(図33)。細川家全体がキリシタンだった時期があることは、まちがいない。忠利も若き日には耶蘇教の信者ないしはシンパ(共感者)であつた。

手紙を受け取った側、仙台・伊達といえ、支倉常長の慶長遣欧使節が想起される。忠宗の父伊達政宗は、使節派遣によつて、幕府の禁教政策に逆行するキリシタン拡大政策を提案、あわよくばスペインと同盟を結んで、徳川政権にとつて代わろうとした。常長の子常頼はキリシタン禁制を破つたため、領地没収の上切腹させられるが、それは島原の乱終了後の寛永十七年(二六四〇)のことだつた(大泉光一『支倉常長』一九九九)。

「キリシタンはどのような才覚を持つているかもしれない」「遠国にもたやすく飛火する」。忠利の言葉には真実味がある。国内に網の目に張りめぐらされたキリシタンの地下組織。キリシタン組織の存在をよくよく知っていた人物。それは実は忠利であつた。

その細川忠利の領内自体も危なかつた。葦北郡、八代郡、宇土郡。天草と海続きで、昔からキリシタンは多く、かつ旧領主小西行長は熱心にそれを保護していた。危険地帯ばかり。乱の発生をうけて細川家は「一揆不起様に」、それら地域の対策に腐心した(『綿考輯録』五四四〇頁)。

一番危険だったのは長崎である。長崎代官末次平蔵が大坂町奉行に宛てた十一月十五日の書状には緊迫感が満ちあふれている(『島原日記』〈『原史料で綴る天草・島原の乱』〇三六八)。幕府方は兵力のかなりを



図 33 南蛮鐘 ((財)永青文庫蔵)
教会に架けられたのであろう。細川家の家紋
(九曜紋)が入っている。

割いて日見峠など長崎口の警戒に当たった。この峠は実際に長崎をめざした一揆方が越えようとした道である。また鍋島家でも長崎に備えて藩境諫早に五千の兵を待機させた(『有馬之役』『島原半島史』三一九頁)。長崎奉行の榊原職直、馬場利重は江戸より直ちに戻され、大村藩鉄砲隊支援のもとに、やっと長崎に入った(『岡山藩聞書』『原史料で綴る天草・島原の乱』〇八四五)。

長崎は戒厳令下に置かれた。長崎には多くのキリシタンがいる。幕末まで村中全員がキリシタンであることを買いた浦上村の例を引くまでもない。その中心に出島があり、ポルトガル商館が置かれていた。乱の当初、天草で行方不明になった益田甚兵衛、四郎(天草四郎)父子を熊本藩が搜索していた。そのとき甚兵衛は長崎に行っていた(『綿考輯録』五一―三八頁)。蜂起の直後に、一揆の指導者・首謀者が戦列を離れ長崎に行っている。甚兵衛は細川領の宇土郡江部村の人間だったが、出身地は天草の大矢野、長崎浜の町に住んでいたこともあり(『白石紳書』六ほか)、長崎の地理、事情には明るかった。

なぜ惣大将格の甚兵衛が戦列を離れたのか。考えられることの第一は同調するキリシタンたちへの連

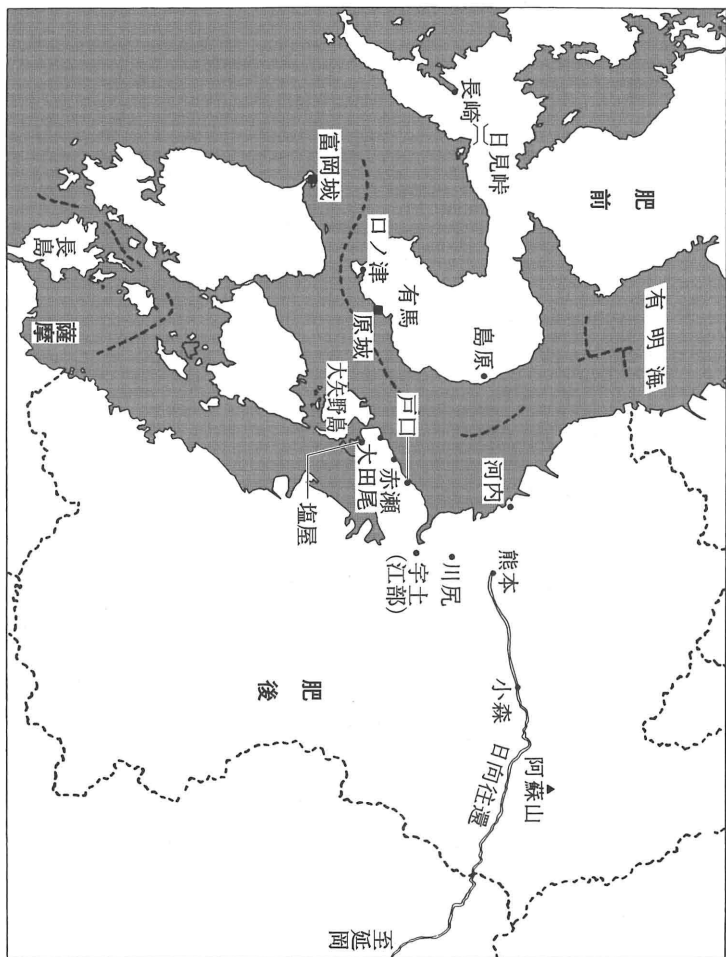


图 34 有明海周边图

絡。第二にはより重要なこととしてポルトガル商館への連絡。長崎への使者には彼こそ最適任だった。キリシタンにとつての長崎はきわめて重要な戦略地で、当初一揆方は長崎をめざして進軍した。幕府軍に阻まれて、原城の籠城戦に作戦を切り替えた。

一揆方は原城の城内から「国々のきりしたんにおこり候へ」と、次々に使者を派遣した。そう記録されている（二月三日松野織部ら三名書状、『綿考輯録』五一四三〇頁）。

肥後・肥前・中国・四国・畿内・出羽・陸奥。日本国内にはいまだにキリシタンは多く、天草・島原に続き、いづどこでキリシタン一揆が起きてもおかしくはなかった。そして一揆の側は必死で各地のキリシタンに蜂起を働きかけた。

キリシタンは商売人、出家、山伏、「はかせ」の姿をして隣国に潜るといわれていた（薩藩旧記雑録・十二月二十二日島津久賀ら書状、『原史料で綴る天草・島原の乱』〇二三八〜九）。「はかせ」は陰陽師、被差別民である。

乱終結後の寛永十五年五月、薩摩で捕えられたキリシタン一揆の大將、芦塚忠兵衛の子ども（皆吉長右衛門・芦塚権右衛門）、そして孫が処刑された。小さな子供まで処刑されるというのは、かれらが一揆方の大將格と認識されていた証左である。芦塚兄弟もまた任務を帯びて薩摩にいた（『嶋原日記』ほか、『原史料で綴る天草・島原の乱』一五六四、六五、七六、七七、七九、八一）。

この事態に五月十六日、薩摩・島津光久は琉球王府に対し、つぎのように指令した。

「命琉球国曰、原城既陷、貴理師且喪其巢穴、恐有余党奔逸、若至爾国、輒捕送之、不能即殺之」（『島津国史』）

「原城からのキリシタンが琉球にいったならば、生け捕りにして、薩摩に送れ、直ちに殺したりしてはいけない」。

単なる残党、落武者ならば、殺したとて、かまうまい。わざわざこのような指令を出す必要はない。かれらはある任務を帯びて、琉球に潜伏している。生け捕りにして確認しなければならぬことが多くあった。

その琉球。この南の島に、やはりキリシタンが潜伏していた。男は「御国元」すなわち薩摩からきたという。すなわち島原の乱後の崇禎十三年（一六四〇、日本寛永十七年）、次の記録が残されている。

「崇禎十三」

同年御国元之人玄々と申者、御当地被_レ致_二居住_一候処、鬼利死丹之法相学候様風聞被聞召、御国元江被遣候付、宰領座喜味・姓名不伝」（『大和江御使者記』、沖縄県立図書館「東恩納文庫」）

かくして潜伏していたキリシタン玄やは「御国元」（薩摩）に送還された。むろん、いまに残された断片的史料のみからでは、彼が原城の関係者であったのか、否かを確認することはできないのだが。

薩摩から琉球にかけて潜んでいたキリシタンたちは、何をもくろんでいたのだろうか。生け捕りを指示した幕府は何を聞き出そうとしていたのか。

三 援軍の本命はポルトガル——カソリック（イエズス会）とプロテスタントの宗教戦争

籠城作戦は援軍が来ることが大前提である。援軍のこない籠城には意味がない。三河長篠城、備中高松城、尾張大高城。いずれも援軍の到来までの籠城戦だった。そこに勝機が見出せるからこそ、籠城し



(伝習館文庫蔵、柳川古文書館提供)



図 35 原城を攻撃する阿蘭陀船

たのである。……

三〇年前、一六〇五年にはキリスト教徒の数は一七五万人、日本の人口の一〇分の一を占めた（大泉光一『支倉常長』一九九九）。日本にはキリシタンはまだまだとても多かった。抑圧された各地のキリシタンが、連帯して一斉に蜂起する。日本は内乱状態になる。そこに本当の援軍が来る。琉球の先は中国。そこには澳門（マカオ）があつた。ポルトガルのアジア最大の拠点である。ポルトガルこそが、一揆が頼んだ援軍の本命だつたのではないか。

幕府方の総大将、松平伊豆守信綱はなんとオランダ船に依頼して、海また陸から原城を砲撃させた。この作戦には反対者が多かった。細川忠利は「攻めよといわれれば、我等熊本勢だけで攻め落としますましてこれだけの軍勢、ただ味方の損害を少なくするためだけに、こうしてじっくり攻めている。わたしはそう了解していました。外国船の手を借りるのは如何か。日本の恥辱そのものではないか」と激しく批判・抗議した。それに対し信綱はこう答える（『綿考輯録』五―四〇九頁）。

「伊豆守殿被_レ仰候ハ、拙者異国船を呼寄候ハ、一揆共南蛮国と申合せ、追付南蛮より加勢指越候_{（如）}なと百姓共を欺き申由なれハ、異国人に申付、鉄炮打せ候ハ、南蛮国さへあのこときとて、城内の百姓とも宗旨の靈言を合点可_レ仕かと存付候はかりにて、日本の恥に成候との儀は料簡無_レ之」

（切支丹どもはおつつけ南蛮より味方が来るなどといっている。その南蛮船から砲撃されることこそ、彼らに一番の衝撃を与えることができる。）

一揆はイエズス会（旧教）の影響下にあつた。発掘調査で原城から出たメダイ（メダル）にも、イエズス会のロヨラやザビエルの像が描かれている。「サンティアゴ！」一揆方の関の声は神の国ポルトガ

ルの戦士に同じだった〔商館日記〕一月八日条）。ポルトガルは旧教国（ローマ教、カソリック）。攻めたオランダは新教国（プロテスタント）。

オランダは旧教国スペイン（イスパニア）領の一部だったが、新教の信者が多く、旧教スペインによる宗教弾圧を嫌い、独立しようとした。独立戦争、八〇年戦争である。一五八一年にオランダが独立宣言をし、一五八八年のスペイン無敵艦隊の敗北を経て、一六〇九年のオランダの実質的な独立を経たのも、なお戦争状態にあった。互いを「不倶戴天の敵」と認識し〔オランダ商館日記〕一六三八年九月五日条）、島原の乱のさなかに該当する一六三八年の二月五日（西暦）には、ゴア沖でポルトガル艦隊とオランダ艦隊が海戦し、双方の船が炎上した〔同上〕一六三八年七月一〇日条。こうした状況下、オランダ側が幕府と結びついた。一方、対抗してポルトガル・スペイン側が反幕府勢力キリシタンと結びつく。そうした図式が当然ありえた。

オランダが原城のキリシタンを攻撃することは、ポルトガルを攻撃することと同じである。幕府Ⅱオランダ、一揆Ⅱポルトガルという軍事同盟の構図がみえてくる。実際に幕府は一揆の背後にカレウタ（ポルトガル）船があり、カレウタ船の背後に一揆があると警戒していた。

乱の最中でいえば、オランダ船レイブ号が有馬に到着するや否や、上使戸田左門は、オランダ商館長に対し、さかんにマニラ攻略の可能性を問いただした〔商館日記〕一六三八年二月二十四日条・日本暦寛永十五年一月十一日）。マニラはスペインの拠点、ルソン（呂宋）である。敵は有馬だけではない。マニラ・マカオが同時に敵だ。叩きたい。作戦本部の司令塔、上使戸田はそう認識していた。

乱の二年後、寛永十七年六月十八日の「覚」〔古記録〕には、

一 かれうた船来り候時、国主江人数を出し候様にと申遣し候剋、その所の切支丹、跡にて起こらざる様に堅く仕置仕るへき旨、申越すへき事

一 右の船来たり候剋、(中略)もし人数を出し候跡の国に、切支丹の徒党起こるにおいては、承届け、加勢仕るへき覚悟いたし候様に申越すへき事

とあつて、ポルトガルとキリシタン一揆の連動への、幕府の警戒感が如実だ。実際には両者の連携は実現しなかった。冬は北風が卓越する。長崎からマカオ(澳門)への連絡はできたかもしれないが、逆は不可能だった。そして一揆は風が味方してくれる春三月まで持ちこたえることはできなかった。しかし両者の連携を、少なくとも連携があるとみた幕府側の認識を、きわめて象徴的に示すできごとが、島原の乱の最後に見られた。

すなわち天草四郎の首はポルトガル商館前に晒された。『オランダ商館日記』一六三八年六月一日条では「最も主要な人々の首四つは、約四千の他の人々の首とともに長崎に運ばれ、そして(若干は)棒に刺して梟しものにされた」とある。

主要な首四つとは天草四郎とその姉、いとこ渡辺小左衛門、また有家監物である(『長崎志』二六五頁、海老沢有道『天草四郎』、昭和四二年・人物往来社、二二三頁)。その場所については出島橋または大波戸と書かれている(同上、ほか『稿本原城耶蘇乱記』『島原半島史』五二四頁、『崎陽略記』『長崎古今集覧』)。

首謀者たちの腐敗した首が、長崎大波戸の出島橋、すなわちポルトガル商館の前に晒された。この橋を渡る人間はポルトガル商館出入りの者のみだ。くわえてここは西坂のような獄門場ではない。すさまじく、重苦しい示威だった。敵対国への強烈な見せしめだった。

そしていわゆる「鎖国」へ。ポルトガルは日本から放逐される。いっぽうオランダは出島という場所に制限はされたが、通商が許された。もし「鎖国」(海禁)がキリスト教の布教を恐れての措置だけだったのなら、明らかにキリスト教国であるオランダとの貿易は許されるはずはない。

幕府はオランダがキリスト教国であることは百も承知だった。平戸のオランダ商館は、建物に記されたキリスト暦(The Christian Era, 西暦)の使用を口実として壊されている。しかし通商は許した。幕府側の貿易による利潤を求める声も強かった。そうしたことは当然であろう。しかし、もつとも重要視されたのはオランダのもつ、対ポルトガル・軍事同盟者としての役割だった。オランダは明らかにキリスト教国であるにも関わらず、ポルトガルを排除しうる武力として、通商が許された。

参考文献

一九五四年

林銑吉『島原半島史』(長崎県南高来郡教育会)

一九九四年

鶴田倉造編『原史料で綴る天草島原の乱』

一九九八年

服部「原城の戦いと島原・天草の乱を考え直す」丸山雍成編『日本近世の地域社会論』八五―一三七

頁

二〇〇〇年

石井進・服部共編『原城発掘——西海の王土から殉教の舞台へ——』(新人物往来社)

二〇〇二年

八代市未来の森ミュージアム『天草・島原の乱』(展示図録)